

『石崎操日記』

——朝鮮・新義州からの引揚げ記録——

解題

飯倉江里衣、湯川真樹江

『石崎操日記』は、朝鮮半島の新義州で敗戦を迎えた石崎家の引揚げ過程を記したものである。本日記には、1945年9月3日に伝達された「新義州駐屯ソ聯軍司令官ノ命令」と、石崎家が1946年9月29日に引揚げを開始してから、博多に到着する1946年10月31日までの33日間の行程が記されている。ここでは、日本敗戦直後の朝鮮半島情勢と日本人の引揚げ状況を概観し、本日記の史料価値について言及する。

なお本日記は、執筆者・石崎操氏のご子息である石崎清之氏によって提供された。石崎清之氏は、2014年10月1日付けの『読売新聞』（多摩版）に掲載された本研究会に関する記事をご覧になり、連絡をくださった。本研究会では石崎清之氏との面会および史料の確認・調査を経て、本日記を公開することを決定した。解題の後ろにある2枚の写真も石崎清之

氏から提供いただいたものであり、写真1は1946年10月24日の日記の内容で、写真2は石崎操氏と家族の記念写真である。このような貴重な史料を本研究会に提供くださった石崎清之氏に心より御礼申し上げたい。

1 石崎操氏の経歴と朝鮮

石崎操氏は、1899年6月に山口県で生まれ、1924年に拓殖大学商科を卒業後、朝鮮の新義州にある鴨緑江製材無限制会社に入社した。1931年には平安木材株式会社支配人に就任し、敗戦まで鴨緑江林産株式会社の常務取締役などの要職を歴任した。朝鮮半島北西部の鴨緑江河口附近に位置する新義州は平安北道第一の都市であり、近隣の森林が豊かであったことから20世紀初頭より伐採業が盛んであった。

1945年8月15日、日本の無条件降伏

によって朝鮮が日本の植民地支配から解放された。それによって8月21日には元山へソ連軍が、9月8日には仁川へ米軍が進駐し、38度線を境に南北それぞれにおいて占領統治を開始した。石崎家がいた新義州には、8月30日にソ連軍司令官チスチャコフ大将らが進駐した。31日にソ連軍は、平安北道の行政その他一切を朝鮮人の平安北道臨時人民政治委員会に引き渡すことなどを命じている。『石崎操日記』のはじめに記された「新義州駐屯ソ連軍司令官ノ命令」はその時期に発せられ、9月3日に平安北道臨時人民政治委員会産業部長代理・金景場氏によって日本人に伝達されたものであった。

朝鮮北部からの正式な引揚げは、1946年12月から1947年7月までの計13回にわたって実施されたが、石崎家の引揚げはこれより前の時期に行われている。朝鮮北部ではソ連軍進駐後、各地で移動禁止命令が出されていた。しかし、多数の死亡者が出たことから、大半の日本人は1946年2月末より38度線を越えて南下することを決断したのである。『石崎操日記』で描かれるように、朝鮮各地の日本人は引揚げるまでの間、「日本人の保護と治安確保」のために組織された日本人世話会の援護を受けた。新義州の世話会は、ソ連や朝鮮側と引揚げや労務に関する交渉なども担った。

一方、朝鮮南部からの日本人引揚げ事業は米軍政庁の下で管理された。朝鮮南部各地でも日本人世話会が結成され、

1945年10月頃から引揚者名簿の作成や、引揚げ順位の決定といった出発準備のほか、引揚げ列車での輸送業務なども行われた。特にソウル(旧京城)や釜山の日本人世話会は、石崎家のような朝鮮北部からの避難民の受入れ・引揚げ業務も担った。

石崎操氏は鴨緑江林産株式会社の引継ぎ業務を行い、1946年9月29日に新義州を出発するが、その道のりは苦難に満ちたものであった。本日記には、その間の食事や米軍からの要求、38度線を越える際の苦労や経由地での状況などが記されている。石崎家は1946年10月12日に38度線以南の議政府に到着し、駅近くの畑や野原に建てられた米軍のテント収容所で約2週間を過ごしている。

石崎操氏と家族は、新義州を出発した約1か月後の11月1日に博多へ上陸して、親しい友人が住む島根県津和野町に1年間身を寄せ、その後一家は東京へ移住した。引揚げ後は、同じく朝鮮から帰還した元社員の名簿や彼らの再就職を求める「製材工場起業嘆願書」、「在外私有財産返還請求書」などを作成し、元社員の福利厚生にも尽力した。これらの書類には石崎家が朝鮮で所有していた不動産や株式などの情報が記され、1962年の在外私有財産の返還補償請求時にも活用された。1964年7月に石崎操氏が死去したことに伴い、本日記を含む遺品は石崎清之氏ら遺族によって保管されることとなった。

2 日記の史的価値

次に、本日記の史的価値について述べる。第一に、これが過去を振り返って書かれた回想録ではなく、引揚げの最中に記された史料であるという点があげられる。敗戦後に、ソ連軍占領地の朝鮮北部から引揚げた人々による回想録はこれまでにもあるが、その当時の状況を移動しながら書き残した日記は極めて珍しい。引揚げの過程においては、多くの日本人が生活困難に陥り、過酷な逃避行を経験した。このような状況下で一個人が日記を記すことは大変難しく、たとえ記録していたとしても、混乱の中で紛失したり、引揚船に乗る前に没収されたりするケースが多かった。したがって、幾多の困難を乗り越えて、石崎操氏が本日記を無事に日本まで持って帰ってきたことには稀有性が認められる。また本日記を通して、石崎家の家族の様子や日々の行動のほか、収容所での食事、物価（柿、薯、餅など）などの詳細な情報も確認することができ、そこから公文書にはほとんど記されることのなかった引揚げ過程の日常を知ることができる。

第二に、本日記に描かれる人々の多様性である。本日記には、石崎家の人々のほかにも、新義州の日本人や日本人世話会の関係者をはじめ、ソ連軍、米軍、柿や栗を売りに来る朝鮮人の姿も描かれている。従来の日本人の引揚げに関する研究では、移動する日本人の経験に焦点が当てられる傾向にあった。しかし実際には、

本日記からも明らかなように、日本人は移動する過程において様々な人々との接触があり、ときには衝突し、交渉しながら日本を目指して進んでいったのである。本日記からは、その移動過程における石崎氏の心境をもうかがい知ることができる。

第三に、石崎家が暮らしていた新義州のように、満洲と朝鮮の国境付近の都市からの引揚げについては、これまで十分に研究が進められてこなかった。たとえば、満洲からの引揚げが葫蘆島や大連などの海路だけでなく、朝鮮半島を經由して釜山から引揚げたケースも多かったことはあまり知られていない。ソ連参戦の1945年8月9日前後より、満洲全土から約6万人もの人々が朝鮮北部に避難し、その多くは南部の港（釜山など）を經由して日本に帰還している。本日記にも、議政府へ到着した石崎操氏が「先着者安東ヨリ約350名アリ」（1946年10月12日）と記しているように、満洲の都市である安東（現丹東）から日本人が引揚げていたことも確認できる。そのため、在満日本人の引揚げ経路には在朝日本人とも重なる部分があり、引揚げ過程における朝鮮での経験は、在満日本人の記憶にも影響を及ぼしたと考えられる。本日記は、在朝日本人の引揚げ研究にとってはもちろんのこと、在満日本人の研究にとっても重要な手がかりを提供している。

本研究会は、本誌にこの貴重な日記を掲載することで、朝鮮あるいは満洲から



写真2 石崎一家の記念写真（1944年、新義州にて）

注記：長男・健男氏が1944年に海軍飛行予科練習生に志願し、家を出発する前の記念写真。右から父・操氏(45歳)、長男・健男氏(17歳)、長女・安子氏(13歳)、次男・義人氏(11歳)、三男・清之氏(6歳)、次女・トモ子氏(2歳)、母・戸羽氏(42歳)。